

令和5年度 学校自己評価システムシート (さいたま市立 つばさ 小学校)

学校番号 102

【様式】

目指す学校像	◆子どもたちが生き生きと輝く学校 ◆地域とともに発展する学校	◆教職員と保護者・地域がチームとなる学校 ◆職員みんなが力を発揮する学校
--------	--	--

重 点 目 標	1 教育D X(デジタルトランスフォーメーション)で実現させる学びの自律と個別最適化、探究化 2 一人ひとりの多様な幸せ(Well-being)を実現する未来の教育の実現 3 地域の高い教育力を生かしたコミュニティ・スクールの推進 4 子どもの可能性を最大限に伸ばす教職員の資質向上研修の充実
---------	---

※重点目標は4つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、
方策の評価指標」を設定。

達成度	A	ほぼ達成 (8割以上)
	B	概ね達成 (6割以上)
	C	変化の兆し (4割以上)
	D	不十分 (4割未満)

学 校 自 己 評 価								学校運営協議会による評価	
年 度 目 標					年 度 評 価			実施日令和 年 月 日	
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校運営協議会からの意見・要望・評価等	
1	〈現状〉 ○全国学力・学習状況調査や市の学習状況調査では、国語、算数ともに全国、市平均と比べ概ね良好な結果である。 ○日頃の学習の様子から、学級には、様々な特性をもつ児童が存在することから、学習指導上、誰一人取り残すことなく、配慮を要する児童へのきめ細かな指導が必要である。 〈課題〉 ○学級には、【浅い】理解から【深い】理解までの多様な児童が存在する中で、特に習熟の差が生じやすい教科等において、個別最適な学習の実現に課題がある。 ○習得・活用の「活用」場面で、協働学習から学習の有用性を実感させ、学習意欲を向上させる必要がある。	・誰一人取り残さない多様な子どもの学びの充実	①「焦点化・視覚化・共有化」の視点から授業改善を行う。 ②スタディサプリ、ドリルパークなどのＩＣＴ教材を活用する。 ③学習活動の基盤となる読解力をはぐくむため、読書活動を推進する。	①「授業が分かりやすい」と回答する児童の割合が９５％以上となったか。 ②スタディサプリ、ドリルパークを日常的に使いこなせたか。 ③学校図書館での貸し出し冊数データを分析し、児童が日常的に読書に親しめたか。					
		・学びの自律化・探究化に向けた情報端末の活用、授業改善	①ＧＩＧＡ端末を効果的に活用した授業を日常的に実践する。 ②「学びのポイント」（じしゃく）を活用した授業改善に取り組み、「探究的な学び」を実現する。 ③従来型の読解力とＰＩＳＡ型の読解力を自由自在に働かせ、「探究する読み」のできる子どもを育成する。	①ＧＩＧＡ端末を効果的に活用した授業が日常的に実践できたか。 ②教員アンケートにおいて、関連する項目の肯定的な回答の割合が９０％以上となったか。 ③市学調の読解力に関する問題について、正答率を９０％以上とすることができたか。					
2	〈現状〉 ○不登校や不登校傾向の児童、様々な特性をもつ児童、様々な配慮を要する児童など、多様化している。 ○現在の教室の中にある多様性を、主として、学級担任１人が、児童への指導に当たっている。 〈課題〉 ○コロナ禍や、社会情勢に対するストレスや不透明感、生活の変化が児童の心身に与える影響が大きいことから、今後も、児童一人ひとりの状況を的確に把握し、適切なタイミングで組織的に支援・相談していく体制、仕組みづくりが課題である。 ○本校の「不登校や不登校傾向の子どもたちの居場所となる教室」の体制、仕組みづくりが課題である。	・児童一人ひとりへの細やかな教育支援・相談に向けた校内体制の充実	①生徒指導委員会等において子どもの様子を全職員で共有し、ケース会議等組織的な対応の充実により、個に応じたきめ細やかな支援を行う。 ②「不登校や不登校傾向の子どもたちの居場所となる教室（校内教育支援センター）」の体制、仕組みづくりを行う。	①情報共有・共通理解を図った子どもについて、生徒指導主任・教育相談主任・特別支援教育コーディネーターが中心となり、担任のみに抱え込まず、組織的な支援が日常的に実践できたか。 ②校内教育支援センターの設置のための体制、仕組みづくりを９月までに行うことができたか。					
		・エイジェンシーを育成する特別活動等の充実	①自分たちの学校生活を見つめ直し、潤いある豊かな学校を自分たちの手で実現させていく自治的活動を行う。 ②子どもにとって学校の一番の居場所は「担任の懐」であることを肝に銘じ、教育愛溢れる人間教育を実践する。	①子どもが学校生活の改善・充実に向けた自主的・実践的な活動に取り組む姿が見られたか。 ②児童アンケート、保護者アンケートにおいて、関連する項目の肯定的な回答の割合が９０％以上となったか。					
3	〈現状〉 ○登下校の見守り活動や、チャレンジスクール等の学校支援活動など、自治会・育成会・ＰＴＡを中心としたスクールサポートネットワークからの支援を得ながら、地域学校協働活動が充実している。 〈課題〉 ○つばさ小学校の子どもたちに「付けたい力」を、全児童・保護者・地域と共有し、さらに、実現に向けた具体的な行動を起こす。	・保護者・地域との連携、協働による「付けたい力」を育成する教育活動の展開	①「付けたい力」を、全児童・保護者・地域と共有し、保護者・地域の役割と具体的な取組について明確化する。さらに、活動推進のため、学校ＨＰにコミスクのページを開設・活用する。 ②「(仮称)つばさ小サポーターズ」による教育活動への支援を得る。	①学校ＨＰにコミスクのページを開設するとともに、学校だより等を通じて、その更新状況が周知され、保護者・地域の日常的な取組に生かされたか。 ②「(仮称)つばさ小サポーターズ」の体制が整い、学校・家庭・地域が一体となって、教育活動の充実が図られたか。					
		・故郷を愛し、未来の地域社会の担い手となる子どもの育成に向けた取組の充実	①地域人材や地域の文化・学習材など、児童の故郷に係る教育活動を教育課程に位置付け、２１世紀型スキルを育成する。 ②校長自身が地域を愛し、地域から学び、子どもたちへ発信していく。	①４月末日に市教委へ提出した本年度の教育課程を改善・充実させていくことができたか。 ②校長が地域とのコミュニケーションを大切にし、地域から学んだことをつばさ小の子どもたちに還元できたか。					
4	〈現状〉 ○新たな学びのスタイルの中心となる、ＧＩＧＡ端末をはじめとしたＩＣＴの活用方法について、エヴァンジェリストが中心となり研修を重ねてきた。 ○高学年での教科担任制実施により、担当する教科について、より深い教材研究を行うことができている。 〈課題〉 ○ＧＩＧＡ端末の効果的な活用について、定期的に情報交換を行い、学級差を生じさせない取組が必要である。 ○授業準備等を効率的に行い、７時間４５分勤務で業務を終了できる職場づくりが課題である。	・学校職員一人ひとりが力を発揮し、子どもの可能性を最大限に伸ばす教職員の資質向上研修の実施	①全ての教員が授業改善に取り組み、学期に１回以上、授業を公開する。 ②ＧＩＧＡ端末を効果的に活用する指導方法について、定期的に全職員で学ぶ。 ③「研修履歴を活用した対話に基づく受講奨励」を適切に行い、教職員の資質向上を図る。 ④７時間４５分勤務で業務を終了できる職場づくり(学校外での力量等の涵養)	①全ての教員がＧＩＧＡ端末を効果的に活用した【授業改善】に取り組み、学期に１回以上、授業を公開し、学習指導力の向上が図られたか。 ②ＧＩＧＡ端末を活用した指導について、月に１回以上の情報交換ができたか。 ③校長自ら学び、先進的な情報を集め、学校内で共有を図るなどを通して、教職員の資質向上が図られたか。 ④教職員が生き生きと元気に働く職場が実現でき、学校外において力量等が涵養できたか。					